

雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうしてもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

尊敬の対象

人は大抵誰でも尊敬の対象があると思われる。対象は人ばかりでなく、動植物や抽象物であったり、想像上の物事の場合もある。ただし人の場合、本稿では親族は扱わない。尊敬することは、学び、見習い、憧れの気持ちを抱くことにつながる。ある人の知識や技術には到底及ばないが、それを羨み、自分もそうありたいと思うなら、それがその人への尊敬の証しになる。芸や習い事などで師と仰ぐ人を持つことは良いことと思う。

敬意は心の内面、即ち意識の一つで、その対象や度合は個人ごとに異なる。そして私的な意識については概して表明を好まないように思う。他人に「あなたが尊敬する人は？」と訊いたり、その理由を訊ねるのは、差し障りがあるかも知れない。誰もが知る歴史上の偉人の名を挙げれば無難であろうが、それでも心の内面を訊くことになるから、人によっては訊かれないかも知れない。また「多くの人が誰々を尊敬するから私も」というのは、尊敬の本来の意味から外れている。悪いとは言わないが、本来は自分が本心から敬う対象でなければならない。

過去の思想統制の時代には、尊敬する人が誰であるかによって、その人の思想が推定され、罰せられることがあった。図書館でどんな本を借りたか、どういう人と交際しているかなども、その人の思想を知るための情報とされた。現在の日本は思想の表明は自由になっている。しかし現在のドイツではナチスを讃える言動は違法とされている。

自分以外は全て学ぶ対象である、とは誰かの言葉だったように思う。自分は常に未熟だという意識が原点にある。良い言葉だと思う。このことは自分以外の人の言動を鵜呑みに受け入れるということではない。他人の言動には賛同できる場合と出来ない場合がある。それらをよく区分して賛否を選び分ける必要がある。これまで気がつかなかった自分の足りない部分を補うような事柄が見つければ、それこそ発見気分で自分に取り入れる、これが学びであり、その人(の言動)は尊敬の対象にふさわしい。自分の考えに反対の考えにはよく耳を傾け、内容をよく吟味して取捨する心がけが大切であろう。反対であった他人の意見を受け入れるということは、自分が改心することであり、その意見(人)は尊敬に値する。

敬意には度合がある。対象によっては熱烈に、あるいは軽い気持ちで敬う場合もある。尊敬の度合は時と共に変化する。同じ度合で永続するとは限らない。何かのきっかけで強くなることもあるし、弱くなり、あるいは敬意が消えてしまうこともある。

運動競技などで好成績を上げている人には、大抵の人が注目するであろう。楽しみや感動をもたらしてくれる人で、敬意を覚えることがあるが、尊敬の対象とは少し違うように思う。

芸能人等に対する好意も、尊敬の念とは少し違うように思うが、敬意と重なる部分があるように思う。

私にも尊敬の対象はある。私はかなり頑固な性格だが、考え方を改めさせられる事がたまにある。そうさせるものは私にとっては高度の尊敬の対象になる。男女、年齢、経歴、社会的立場などには関係ない。